# アメリカのディレンマと黒人のディレンマ

## ——W・E・B・デュボイスの黒人百科事典プロジェクトをめぐって——

竹 本 友 子

## 1．問題の所在

スウェーデンの経済学者G・ミュルダール（Gunnar Myrdal）によって書かれた『アメリカのディレンマ』(*An American Dilemma*, 1944）が、第二次大戦後の合衆国の黒人公民権運動に多大な影響を与えたことはよく知られている。ミュルダールはこの著作において、黒人に対する白人の人種差別や偏見のすさまじい実態をありのままに呈示し、それがいわゆるアメリカ的信条に背馳するものであることを指摘した上で、この道徳的ディレンマに正面から立ち向かうことを白人に促した。第二次大戦中、ナチスの人種主義的イデオロギーに対抗する必要が強く意識される中で発せられたこの力強いメッセージは、黒人はもとよりリベラルな白人の心を捉え、人種問題に積極的に取り組むべきであるという合意の形成に大きな役割を果たした。人種問題を基本的に「白人問題」と捉え、黒人よりも白人の態度や行動に重きを置いたミュルダールの黒人コミュニティや黒人文化の評価をめぐって、公民権運動が転換点を迎える1960年代半ば以降はミュルダールの主張に異議が唱えられるようになる(1)。しかし、少なくとも公民権運動最盛期の20年間にわたって、ミュルダールの立場は合衆国の人種問題に関する正統的教義（orthodoxy）であり続けた。

総計1500ページに及ぶこの大著は、カーネギー財団法人（Carnegie Corporation）が25万ドルを注ぎ込んで1930年代半ばに着手した研究プロジェクトの産物であったが、実はその時点でこれに劣らぬ規模の黒人研究プロジェクトが進行中であった。それがフェルプス・ストークス基金（Phelps-Stokes Fund）の後援でW・E・B・デュボイス（William E. B. Du Bois）が中心となって進めていた黒人百科事典の編纂である。しかしこちらはカーネギー財団を含めて頼みにしていた諸財団の財政的支援が受けられず、1941年に挫折した。

デュボイスの百科事典プロジェクトとミュルダールのプロジェクトをめぐる一連の経緯には、黒人の教育・研究活動とそれを支える白人フィランスロピーの関係が明瞭に反映している。端的に言えば後者が前者の命運を握っていたということになるが、両者の関係はかならずしもそのような一方的なものではなかった。自らの百科事典プロジェクトの挫折の原因の一つがミュルダールのプロジェクトの開始であったことを認めつつ、しかも黒人コミュニティや黒人文化の評価に関してはミュルダールと見解を異にしていたデュボイスが、それにもかかわらず『アメリカの

ディレンマ』に対してきわめて好意的な評価を与えた理由の一端はそこにある[2]。すなわち、デュボイスを含めた黒人たちが白人フィランスロピーの黒人教育・研究に対する支配に対抗する中で発揮された主体性と、さまざまな圧力にもかかわらず蓄積されていった彼らの学問的成果が、直接的にも間接的にもミュルダールのプロジェクトの過程と結果に十分反映されていったと考えられるのである。

本稿ではデュボイスの百科事典編纂プロジェクトの経緯とミュルダールのプロジェクトへのデュボイスの関わりを見ることで、1930年代の人種関係の一面を明らかにしたい。

## 2．財団と黒人の教育・研究

南北戦争後、南部における黒人の高等教育に率先して取り組んだのは、アメリカ伝道協会（The American Missionary Association）に代表される教会・伝道組織であり、その活動によってデュボイスが勤務したアトランタ大学や彼の母校であるフィスク大学等、多くの黒人大学がつくられた。その一方で、スレイター基金（John F. Slater Fund）やローゼンウォルド基金（Julius Rosenwald Fund）、ロックフェラーの出資による一般教育委員会（General Education Board、以下GEB）、フェルプス・ストークス基金などもそれぞれ黒人教育に対する支援に乗り出すようになる。教会・伝道組織が黒人教育機関を設立したり所有したのに対し、主として産業界の成功者である大実業家が創設したこれらの財団は、黒人教育機関への財政的支援によってしだいに影響力を強めていくことになった[3]。

やがて伝道協会が財政難に苦しむようになるとそれに伴って黒人大学の経営も困難になり、その質的低下が指摘されるようになるが、この窮状を救ったのが財団であった。W・ジャクソン（Walter A. Jackson）によれば、財団はそもそも南部の人種隔離体制の枠内で白人にとって有用な黒人労働者を創出することをめざして、ハンプトン・タスキーギ型の実業教育に賛成しており、黒人の高等教育には熱心ではなかった。しかし第一次大戦以降は黒人の高等教育を財政的に支援し、積極的に関与するようになる。とはいえJ・アンダーソン（James D. Anderson）は、これは財団が方針を転換したわけではなく、南部の実情に通じた黒人指導者を養成するために少数の黒人大学を残して統制下に置く一方、その他の黒人大学を整理することが目的であった、と指摘している[4]。この結果として起こったのが、デュボイスの母校であるフィスク大学をめぐる一連の騒動であった。

1915年にGEBによってフィスク大学に送りこまれたF・マッケンジー学長（Fayette A. Mckenzie）は、GEBの期待どおり南部経済の繁栄のための「奉仕」教育を目標に掲げて保守的な方針を採り、学生自治組織の解体や学生新聞の停止、NAACP関係の「過激な」文書を図書館から追放するなど、学生の規律強化に努めた。GEBも1916年から年額1万2000ドルの経営資金の提供を開始し、翌年にはさらに5万ドルを寄付するとともに、カーネギー財団にも援助を依頼し

た[5]。それにもかかわらずフィスク大学の財政事情が好転しなかったため、マッケンジー学長らは大学の理事会を改組して保守派で固める一方、大学、財団、地域の白人が一体となった大規模な寄付金募集キャンペーンを展開した[6]。

このときフィスク大学の在学生、卒業生、黒人知識人、地元の黒人コミュニティ組織を巻きこんでマッケンジー体制への反対運動が湧き起こったが、その先頭に立ったのがデュボイスであった。1924年の卒業式に来賓として母校に招かれてスピーチを行ったデュボイスは、経済的支援を得るためにフィスク大学の伝統を破壊するマッケンジー体制を痛烈に批判し、フィスクは「自由の息の根を止めつつ」あると述べたが、その後も大学当局や財団の批判を続ける一方、立ち上がった学生を支援し、卒業生組織などに働きかけた[7]。

学生のストライキやマッケンジーによる警官導入等、フィスク大学の混乱は続いたが、ナッシュヴィルの黒人市民の圧力もあり、1925年4月、マッケンジーは辞任を余儀なくされた。デュボイスが要求した黒人学長の誕生はならなかったが、学生自治の復活や服装規定の廃止など、学生側の要求は認められた。だが、フィスク大学を含めて慢性的財政難に陥っていた黒人大学がGEBをはじめとする財団に依存せざるをえない状況はこれ以後も続く一方、黒人学生の自立意識は強まっていったので、ハワード大学や財団の方針に合致しているはずのハンプトン大学においてさえ、同様のトラブルが起こった[8]。

デュボイスにとって、黒人大学に対する財団の金銭的な締めつけは、すでに1897年から1910年にかけてのアトランタ大学在職中に経験済みであった。もともと自由な校風をもつこの大学で、デュボイスは黒人問題研究の中核組織としてアトランタ協議会（Atlanta Conference）を立ち上げ、1908年までに13の社会学的研究成果を生み出していた。しかしながらデュボイスが後に語ったことによれば、財団が支援していたB・ワシントン（Booker T. Washington）と彼のタスキーギ校をデュボイスが批判していたことから財団の不興を買い、そのためデュボイスがアトランタ大学に留まるかぎり、大学への財政的支援が受けられる見込みはなかった。デュボイスは、学長が「ある一定の状況においては、GEBやその他の財源からの寄付の増加が期待できるというほぼ断定的な約束」を得ており、デュボイス自身が少なくともこの「状況の一つであることは確か」だった、と述べている。このことはまもなくデュボイスが大学を辞する理由の一つとなった[9]。

デュボイスは、第一次大戦後の「GEBが黒人の間の教育の救済者であったことは疑う余地がない」と、財団が果たしてきた役割を評価している[10]。しかし彼は、黒人教育に対する州の援助が得られず、そのような「慈善」に頼らざるを得ないために黒人が率直に物を言いにくい状況が生じていることも指摘している[11]。デュボイス自身学生時代にスレイター基金の奨学金によってドイツに留学することができたし、後述するように著作の出版等においても財団の恩恵を被っていたが、だからといって財団の姿勢や活動に対して口をつぐむことはなかった。1917年にはフェルプス・ストークス基金の協力の下にT・ジョーンズ（Thomas J. Jones）が連邦教育局のために書

いた黒人教育についての報告書を批判し、GEBが「南部白人に降伏」しており、実業教育を偏重していること、さまざまな財団の役員兼務のシステムにより、「合衆国の黒人に対するフィランスロピーを支配」していることを指摘している[12]。さらに1926年にもジョーンズを中心とするフェルプス・ストークス基金のアフリカにおける黒人教育についての報告書を、白人植民地主義勢力に資するものとして痛烈に批判している[13]。しかし、このことがデュボイスの『黒人百科事典』プロジェクトに深刻な影響を与えることになる。

## 3.『黒人百科事典』プロジェクト

デュボイスが最初に黒人についての百科事典の構想を得たのは、1909年のことであった。これは奴隷解放50周年記念の企画として「黒人の歴史と現状に関する主要な事柄を含むアフリカ百科事典」を編纂するというもので、デュボイスは「助言と指導を与えてくれる著名な白人研究者からなる諮問機関」を置くことを考えつつも「実際の作業は黒人によってなされる」ことを望んでいた。すでにハーバード時代の恩師、W・ジェームズ（William James）やイギリスの考古学者F・ペトリー（Flinders Petrie）ら内外の多くの研究者から協力の内諾を取りつけていたようであるが、この計画は資金不足と「当時利用できる黒人の学問的成果が乏しかった」ために断念せざるをえなかった[14]。

それから20年以上経過した1931年、新たに『黒人百科事典』のプロジェクトがフェルプス・ストークス基金によって立ち上げられた。だが同年11月7日にハワード大学で開催された第1回の準備会議には、デュボイスは招かれなかった。会長のA・P・ストークス（Anson Phelps Stokes）はデュボイスの出席を望んでいたが、基金の教育理事である前述のジョーンズによって除かれた。白人の出席者の中にはGEBのJ・デーヴィス（Jackson Davis）やスレイター基金のJ・H・ディラード（James H. Dillard）、カーネギー財団から会長F・ケッペル（Frederick Keppel）の代理としてやって来たR・M・レスター（Robert M. Lester）などが含まれていた。一方黒人側はNAACPのW・ホワイト（Walter White）やフィスク大学のJ・W・ジョンソン（James W. Johnson）らが出席していた[15]。

この会議では企画の内容や編集体制等について幅広く話し合われたが、席上黒人側のホワイトとK・ミラー（Kelly Miller）がデュボイスとC・G・ウッドソン（Carter G. Woodson）の不在を問題にしたため、結果として次回はA・ロック（Alain Locke）を加えた3人にも出席を依頼するという内容の動議が採択された[16]。

当然招かれるべき会議に招かれなかったことは、長く黒人研究に携わってきたデュボイスにとって「個人的侮辱」と感じられたが、自分がかつて果たせなかった夢を実現できる大規模なプロジェクトには抗いがたい魅力があった。プロジェクトへの参加を決意したデュボイスは、ジョーンズらの支配に警戒を示し、「主として黒人が編集や執筆をしない黒人百科事典などとい

うものは、プロテスタントによって計画されたカトリック百科事典と同様に、考えられない」ものだと述べている[17]。

さらにデュボイスはストークスに送付した覚え書で、黒人百科事典は「節度をもって、しかし明確に黒人の観点を表明すべき」であり、「黒人によって編纂され、大部分黒人によって書かれる」べきであると繰り返している。具体的には白人の諮問機関を置きつつも編集責任者と編集委員会は黒人によって構成されるべきことを提案し、黒人研究者が乏しかった時代と違い、「白人研究者の助言と批判、時には参加を得つつ、黒人研究者が百科事典を生み出すことができ、またそうすべきである機が熟した」と誇り高く宣言している[18]。

デュボイスが出席した翌1932年1月9日の第2回準備会議では、当然この点が議論の中心となった。レスターは両人種間の「緊迫した」雰囲気をケッペルに伝え、プロジェクトの実現を危ぶんでいる。席上デュボイスは自説を主張したが、他の黒人たちは両人種が共に編集に携わることを良しとし、そのように決定された。さらに3月半ばの理事会では、黒人側は編集責任者に黒人を起用することを主張し、具体的にはデュボイスの名前を挙げた。結果としてデュボイスが編集責任者に決定し、副編集者には社会学者のR・パーク（Robert Park）が選出された[19]。以上のような事態の展開に驚いたストークスは、デュボイスがいくら傑出した研究者であっても、こうしたプロジェクトの編集責任者というような地位に黒人が就くことは「10年前、いや5年前でさえ」ありえないことだったと述べている[20]

以後デュボイスは精力的にこのプロジェクトに取り組み、広報活動や協力者の確保に奔走するが、副編集者のパークの外遊などもあって、実質的にはデュボイスが一人で取り仕切る形になった。しかしながら問題は資金調達で、プロジェクトは開始早々折りからの不況のため3年間中断のやむなきに至ったが、1934年の春、再開された。まずGEBにアプローチするが失敗、さらにローゼンウォルド基金や連邦の雇用促進局（WPA）にも申請したが、いずれも実を結ばなかった[21]。後述するように1935年の10月にはカーネギー財団の理事会で黒人に関する研究についての決定がなされ、これがミュルダールのプロジェクトに繋がっていくのであるが、デュボイスの黒人百科事典は財団の考慮の対象とはならなかった。

その後もとくにGEBやカーネギー財団への働きかけを中心に資金調達への努力が続けられたが、とりわけ1938年にはGEBからの援助に関して事態が好転するように見えるとすぐまた頓挫するということの繰り返しで、ストークスとデュボイスは翻弄されることになる。GEBが援助を渋る最も大きな理由は、デュボイスがNAACPの中心的スタッフとして長年にわたって黒人の地位向上のための実践的な活動に携わってきたことを考えると、彼が中心になって編纂される百科事典がはたして科学的、客観的なものになりうるのか、と何人かの理事が疑念をもったためであった。当時アメリカではとくに社会科学における客観性や価値中立性が重んじられており、計画されている百科事典が学問的成果というよりプロパガンダの道具になるのではないかと懸念さ

れたのである[22]。

そのためデュボイスはGEBの役員を説得する目的で、客観性についての意見書を数回書いている。1939年に書かれたと思われる覚え書では、人間の行動や意志を扱うかぎり「完全な公平性」は不可能であり、社会科学の不偏性、客観性を最終的に保証するものは、その当事者の「人格と能力」であるとしている。さらにストークスとデュボイスは、高齢のために副編集者を辞したパークの後任として、財団の支持が期待できるG・ジョンソン（Guy B. Johnson）を選んだり、編集体制に修正を加えたりと財団説得の努力を続けた[23]。

しかし、結局GEBもカーネギー財団も黒人百科事典プロジェクトを援助することはなかった。デュボイスは1941年の5月には「現状を現実的に見れば、私の動けるうちに黒人百科事典が何らかの進展を見せる可能性はない」と述べ、プロジェクトの休止を宣言した。理事会への辞職願には、資金が調達できなかった原因の一つとして、カーネギー財団によるミュルダール・プロジェクトの開始が挙げられていた[24]。デュボイスの黒人百科事典プロジェクトは、掲載されるべき項目や文献案内等を含んだ208ページの宣伝ダイジェスト版を1945年に刊行したのみで終わりを告げた[25]。

## 4．ミュルダール・プロジェクトと『アメリカのディレンマ』

第二次大戦後のアメリカの黒人公民権運動を促進したミュルダールの『アメリカのディレンマ』を生み出すことになるカーネギー財団のプロジェクトの発端は、デュボイスが資金調達に頭を悩ませていた1935年秋のことであった。10月24日の財団の理事会の席上、N・D・ベイカー（Newton D. Baker）が北部の都市の黒人の劣悪な状況に関心を向けるべきことを主張し、「財団がその基金を賢明に配分するには、まずより多くの知識、しかもより有機的で相互に関連づけられた知識が必須」であると述べた。ベーカーは「恩情主義的レイシズム」の持ち主であったが、クリーヴランドの黒人に関する調査から深刻な不況の下で貧困や失業や家庭崩壊に苦しむ彼らの絶望的状況を知り、衝撃を受けていた[26]。

このベイカーの提言によって、「アメリカの黒人についての包括的な研究」のプロジェクトがスタートすることになった。ここではこのプロジェクトの成果であるミュルダールの『アメリカのディレンマ』の内容に詳しく立ち入る余裕はないので、本稿の主題との関連のみで扱うこととし、おもにプロジェクトが進められていく過程に焦点を当てる[27]。

カーネギー財団の黒人研究プロジェクトの財団側の中心となったのは、会長のケッペルであった。まず彼は研究を委託すべき人物の選定に取りかかった。そして合衆国にも有能な研究者がいないわけではないが、「この問題全体がほぼ100年の間きわめて感情的なものに包まれてきたので、この企画の責任者には伝統的な態度や昔の結論に影響されずに新たな精神で任務に取り組むことのできる人物を求めるのが賢明に思われた」ために、責任者を「輸入」することに決定した。そ

して「感情的な要素は白人と同様黒人にも影響を与えているので」、候補者選定の範囲は「高度な知的、学問的水準をもちつつも、この研究の完全な公平性とそれによって得られる知見の妥当性に対する合衆国の黒人の信頼を損なう恐れのある帝国主義の歴史や伝統をもたない国に限定」された。そしてこの基準に当てはまるスイスとスカンディナヴィア諸国の中から、スウェーデン人のミュルダールに白羽の矢が立てられた(28)。

スウェーデンの経済学者で政治家でもあるミュルダールが、ケッペルの招請を受け入れ、アメリカの黒人についての研究をするためにアメリカにやってきたのは1938年9月のことであった。候補者の人選に見られたケッペルの細心な気配りは、アメリカにおける黒人の境遇をめぐる議論がいかに扱いにくいものであるかを物語っていたが、とりわけ彼がこの研究に対する合衆国の黒人の反応を気にかけていたことが注目される。彼が選んだミュルダールもアメリカの人種問題についてはほとんど知識をもち合わせていなかったにもかかわらず、問題の複雑さや自分に課せられた使命の重さを理解した。そして社会科学の研究者としての能力ばかりでなく、すぐれた政治的手腕を発揮して大規模なプロジェクトの担い手としての役割を果たした。

ミュルダールはアメリカ到着の翌月から2ヶ月にわたって南部視察を行い、さまざまな人物から助言や情報を得ているが、その中には1934年に再びアトランタ大学に復帰していたデュボイスも含まれていた。ミュルダールは1939年1月に研究計画についての最初の覚え書をケッペルに提出しているが、同時にデュボイスを含めた50人ほどの研究者や専門家に同じ物を見せて批評を請うている。この2度目の会見についてデュボイスは、ミュルダールが「身に余るかなりの大仕事」を2年間で行おうとしていることを揶揄しつつも、彼の計画が「全体としてよく考えられている」と評価している(29)。こうしてミュルダールのプロジェクトは、短期間のうちにではあるが周到な準備と手順を経て動き出した。

1939年春にはおもに若手の研究者の中からミュルダールとともに研究の中核となるスタッフが選定され、その中にはR・バンチ（Ralph Bunche）やD・ウィルカーソン（Doxey Wilkerson）らの黒人研究者が含まれていた。さらにミュルダールはC・ジョンソン（Charles S. Johnson）やE・F・フレイジャー（E. Franklin Frazier）らの黒人を含む31人の研究者にさまざまな主題を割り当ててモノグラフを書くよう依頼した。研究者たちはこのプロジェクトがカーネギー財団によるもので、後の研究支援につながる可能性のあることを十分に意識しており、進んで参加した。またNAACPをはじめとする公民権団体も、プロジェクトの結果がもたらすであろう将来的な影響力を認識しており、積極的に協力した(30)。

翌1940年に母国スウェーデンへのドイツの侵攻の恐れが強まると、ミュルダールは一時帰国するが、1941年3月に再びアメリカに戻って研究を続けた。そして1942年9月、ほぼ完成した原稿をスタッフに託してスウェーデンに帰国した。その後編集や校正を経て、1944年1月、『アメリカのディレンマ』はいよいよ世に出ることになる(31)。

『アメリカのディレンマ』が深刻化する人種問題への「安全な」解決策を求める財団の意向に沿って生み出されたとする見方は、実際にこの書物が出版された1944年以降の公民権運動の経緯を見れば妥当であるように思われるかもしれない。しかしながら、これまで述べてきた準備段階を含めて、ミュルダールのプロジェクトの全体を通じて示されたケッペルの慎重で細心な心遣いやミュルダールの同様な配慮は、半ば戦略的なものであるとしても、デュボイスの黒人百科事典プロジェクトを挫折に追い込んだ財団の守旧派の姿勢とは一線を画するものである(32)。

その最も顕著な例として、ミュルダール・プロジェクトにおいて多数の若い黒人研究者が採用され、重要な役割を担ったことがあげられる。ミュルダールは研究の中核となるメンバーに黒人を含めることにこだわった。とりわけバンチやフレイジャーらは研究の内容に多大な影響を与えた。『アメリカのディレンマ』の中で後に最も議論を呼ぶことになる黒人文化と黒人コミュニティについての記述は、彼らの見解に全面的に依存したものであった(33)。

『アメリカのディレンマ』の大きな特徴は、すでに述べたように客観性や価値中立性を重んじた当時のアメリカの社会科学に対して、アメリカ的信条という道徳的な価値基準を中心に据えたことである。ミュルダールはアメリカの黒人に対する白人の人種差別を、独立宣言や合衆国憲法に体現されたアメリカ的信条＝民主主義的な諸価値と相容れない道徳的な「遅れ」とし、このアメリカ的信条と、特殊な要因や状況に由来する黒人への偏見との葛藤を「アメリカのディレンマ」と呼んだ。そして多方面にわたる人種差別と人種的偏見の実態を丹念に描くとともに、それが黒人にいかに大きなダメージを与えているかを検証し、このような黒人の状況を改善することが、黒人のみならず白人にとっても「大きな社会的利益」になることを説いている。さらに目下の敵であるナチスの人種主義と戦い、戦後に予想される第三世界の国々の台頭に際してこれらの国々との関係を強化するためにも、国内の人種問題の解決が戦略的な重要性をもつことを示し、この問題をグローバルなコンテクストに位置づけた。そしてもしアメリカがその公言する民主主義的信条に従うなら、「国内の福利は直ちに増進されるであろう」し、「国外におけるアメリカの威信と影響力は限りなく高まるであろう」としている(34)。

ジャクソンは『アメリカのディレンマ』の内容には取り立てて目新しいものはなく、「アメリカの社会科学者たちによる20年間の研究」の「有益な要約」であると述べている(35)。このような研究の内容の特徴も『アメリカのディレンマ』が広く支持を得た理由となったろう。そのことは次に見るデュボイスの評価にも表れていた。

## 5．デュボイスと『アメリカのディレンマ』

『アメリカのディレンマ』が1944年１月に出版されると、デュボイスは自らが中心となって1940年につくったアトランタ大学の季刊誌『ファイロン』(*Phylon*) の第５号に早速その書評を載せている(36)。黒人百科事典プロジェクトが挫折した経緯や後述する黒人文化・黒人コミュニティにつ

いてのミュルダールの論じ方を考えれば、厳しい内容になっても不思議ではなかったが、デュボイスの書評はきわめて好意的なもので、批判は含まれていなかった。以下、デュボイスが取り上げている諸点についてそれぞれ検討を加えながら、この評価の意味するものを考えてみたい。

まず最初にデュボイスは、これまでの人種問題に関する研究史を振り返って代表的な作品を取り上げ、それらがすべて「白人の観点」から書かれたものであることを指摘する。その上でそれらと異なるミュルダールの研究の「性格を実際に決めた」のは、そもそもの発案者であるベイカーではなく、ケッペルであったと述べ、ケッペルが「帝国主義的、植民地主義的観点」とは無縁の外国人を選んだことに着目している(37)。

デュボイスらの黒人百科事典への援助に関して理解を示しつつも、カーネギー財団の理事会の意向のために曖昧な態度に終始したケッペルであったが、研究者としてのデュボイスとその社会的活動に対しては高い評価を与えていた。1932年には大不況の中でデュボイスが編集していたNAACPの機関誌『クライシス』が財政難に陥って財団に援助を求めたとき、ケッペルは積極的に理事会に推薦している。これはデュボイスによい感情をもたない複数の理事の反対で実らなかったが、その後デュボイスの著作『アメリカにおける黒人の再建』(*Black Reconstruction in America*, 1935) 出版に際しては、自分の裁量で拠出できる資金から一度ならず援助を与えている。『ファイロン』発刊時にもGEBの援助を得られなかったデュボイスに救いの手をさしのべたのがケッペルであった(38)。ケッペルはデュボイスにとって信頼できる人物であった。

『アメリカのディレンマ』の特徴としてデュボイスが最初に指摘しているのは、「この分野を完全に取り扱っている」その包括性であり、「記念碑的な作品」と最大級の賛辞を贈っている。さらにデュボイスは、ミュルダールが南部の過酷な人種差別の実態を容赦なく暴いていることを評価した(39)。『アメリカのディレンマ』がたんに抽象的なレベルで差別の誤りや人種間の平等を論じるのではなく、具体的に差別の実態を明らかにしていること、また政治的、経済的な差別にとどまらず、社会的な差別についても正面から取り上げていることは、デュボイスを含めて多くの黒人の共感を呼んだ点であった。

デュボイスは、ミュルダールが自らの手で直接調査をせず、多くの専門家に依存していることを批判したある書評に触れ、時間的制約のある中でこのような研究を一人で行うことの不可能を主張し、ミュルダールが「多くの優れた専門家を信頼し」、「彼らの報告から彼自身の報告をまとめた」ことにより、人種問題についての「これまでになく幅広い」研究が可能になったことを指摘している(40)。

ミュルダールのプロジェクトとデュボイス自身の具体的な関わりを見てみると、プロジェクトの初期にミュルダールが2度デュボイスを訪ねて助言を求めたことについては前節で述べたとおりである。実は『アメリカのディレンマ』の材料となるモノグラフを誰に割り振るかを決める段階で、ケッペルはデュボイスの名前を挙げ、「黒人問題」についての全般的な考えを書いてもらう

ようミュルダールに進言した。しかしながらミュルダールは、デュボイスのような年長の研究者はすでに著作をいくつも出版していることを理由として、これを退けた。これはたんなる口実ではなく、現実にミュルダールはデュボイスの著作をよく読みこんでいた。1941年の8月にもデュボイスに手紙を出し、前年に刊行されたばかりのデュボイスの『夜明けの薄闇』(*Dusk of Dawn*, 1940) を読んだことを告げ、その内容について質問をし、デュボイスの助言を求めるべく面会の希望を述べている[41]。

実際のところ『アメリカのディレンマ』においてはデュボイスの名前がいたるところで言及され、彼の著作が広範に引用されている。引用されている作品も初期の『フィラデルフィアの黒人』(*The Philadelphia Negro*, 1899) や『黒人の魂』(*The Souls of Black Folk*, 1903) から前述の『夜明けの薄闇』、さらにはマルクス主義の概念を多用して再建史を書き直し、物議を醸した『アメリカにおける黒人の再建』にいたるまで、きわめて幅が広い。

なかでもミュルダールは黒人コミュニティのカーストと階級に関する研究について述べた章の結びで、デュボイスの「今日ではほとんど忘れられてしまった」『フィラデルフィアの黒人』に言及し、「われわれの要求を最もよく満たしてくれる研究」と絶賛している。D・サザン (David W. Southern) はこのようなことがデュボイスのミュルダールに対する好意的な評価につながったのであろうと推測しているが、先に述べた黒人文化や黒人コミュニティに関するミュルダールの立場を考えるとかならずしもそうとは考えられない[42]。

黒人文化の独自性を主張することは人種差別主義者に利用される危険が考えられたため、戦略的な意味で差し控えられたとしても、ミュルダールが黒人の白人文化への完全な同化を主張したことや、黒人に対する白人の人種的抑圧の破壊的影響を強調するあまりに、黒人文化の独自性についてはきわめて否定的な態度を取り、それを「一般アメリカ文化の歪められた発展あるいは病的な状態」と決めつけたことは、1960年代になって沸き起こるミュルダール批判へと繋がった。だが、誰よりも黒人文化の擁護者であったデュボイスが、この点についてミュルダールを批判しなかったことは注目に値する。D・L・ルイス (David L. Lewis) もジャクソンもそのような欠点を補ってあまりある価値を『アメリカのディレンマ』に見出したことが、この点にあえて目をつぶった理由であると考えている[43]。

そのような戦略的な理由は説得力があるが、つけ加えれば、ミュルダールが高く評価しているデュボイスの『フィラデルフィアの黒人』が、比較的初期の作品であるために黒人文化や黒人コミュニティについてやや曖昧な立場を取っており、白人中産階級の価値基準に基づいてフィラデルフィアの黒人コミュニティに怠惰や浪費などの道徳的欠点や家庭の欠陥等の問題点を見出している点が挙げられるだろう[44]。これらはむしろミュルダールの黒人文化や黒人コミュニティに関する見解を補強するものであり、それゆえ、『フィラデルフィアの黒人』を絶賛するミュルダールをこの点で批判することは難しかったであろう。

ミュルダールが黒人研究者の業績を『アメリカのディレンマ』の内容に十分反映させたことは、デュボイスにとって特別に評価すべきことであった。彼は黒人百科事典のための資金獲得の努力のさなかに、この百科事典プロジェクトの人種間協力の側面を強調し、「黒人の若い科学者の研究に対する寛大な機会と評価、およびアメリカとヨーロッパの双方における黒人と白人科学者の協力とを伴った科学的研究における人種間交流の顕著な実例」は、黒人研究者にとってきわめて価値があると述べている。若い黒人たちに活躍の機会を与えたミュルダールのプロジェクトは、その点でもデュボイスに満足を与えるものであった(45)。

デュボイスはまた、ミュルダールが黒人問題を「基本的に道徳の問題」と考えていることを評価している。人種差別が普遍的な自由・平等をその内容とするアメリカの信条と矛盾するという指摘は目新しいものではなく、デュボイスを含めて古くから黒人たちや反差別の活動家が主張してきたことであった。しかしナチスの人種主義に対する反感が世界中に広がっている中で、ミュルダールがアメリカ的信条の普遍性をもう一度呼び起こし、人種差別に対する道徳的聖戦を呼びかけたことは時宜を得たものであったし、古びた主張に新しい力を与えるものであった。デュボイスはこの書評を書いてまもなくアトランタ大学を追われ、NAACP に復帰するが、その後しばらくは設立直後の国際連合を通じてアメリカの人種問題を世界中にアピールすることによって解決をはかろうと試みる。ミュルダールの道徳的アプローチは国際的な舞台で訴える力をもつものであった(46)。

人種問題を道徳的問題として捉えるミュルダールの姿勢はまた、社会科学のあり方の問題に繋がっていく。アメリカにおいて社会科学の研究に何よりも客観的、価値中立的であることが求められた時代に、ミュルダールは道徳的観点を導入した。デュボイスは百科事典の性格について論じる中で、「歴史学と社会学は人間の感情、願望、意志を考慮に入れなければならない」と断言したが、これは書評における「ミュルダールの社会学は物理的・生物学的・心理学的アナロジーから解き放たれ、公然とかつ率直に感情、思想、意見、理想を考慮に入れている」という評価に繋がるものであった(47)。

黒人知識人は白人の偏見と誤解を正し、黒人に関する正確な情報を普及するという使命と責任を担っていたが、それ自体がプロパガンダと受け取られがちであった。黒人百科事典プロジェクトでは、白人と黒人のどちらが主導権を握るのかをめぐって緊迫した戦いが繰り広げられた。プロジェクト実現の希望が消えかけていた頃、デュボイスは「黒人の研究者が主導権を握って白人がそれに協力するというような百科事典の出版」には十分な資金が得られないのではないかと怪しみ、結局財団の人間は「そのような事業は白人の支配下におかれるべきだ」と考えているらしい、と述べている(48)。ミュルダールは白人の外国人であるがゆえに客観性の壁を容易に飛び越え、アメリカ黒人の代弁者となりえたのである。

## 6．黒人百科事典から『アメリカのディレンマ』へ

1930年代の大不況は社会の底辺に置かれていた黒人にとりわけ大きな打撃を与え、ただでさえ劣悪な彼らの境遇をますます悪化させた。その一方でニューディールの労働政策を背景に、AFLから分かれたCIOが黒人をも組織化するなど、黒人を取り巻く状況が大きく変化していく中で、黒人の教育や研究に関わってきた財団も、黒人の状況を正確に把握する必要を認識するようになった。1909年にはほとんど机上の計画に終わったデュボイスの黒人百科事典が1931年にフェルプス・ストークス基金の手で復活され、さらにその数年後にカーネギー財団によるミュルダールのプロジェクトが開始されたのはそのためである。

黒人百科事典という構想のいわば生みの親であり、合衆国を代表する黒人知識人の一人であったデュボイスが、フェルプス・ストークス基金のプロジェクトに参加するのは自然の成り行きであった。だが、かねてから白人フィランスロピーの黒人教育に対する考え方や援助のあり方を厳しく批判してきたデュボイスは、当初財団によってプロジェクトからはずされた。しかしプロジェクトに参加していた黒人たちはこれに異議を唱え、財団の守旧的な白人たちの思惑を覆してデュボイスを編集責任者にの地位に就かせることに成功したため、デュボイスは長年の夢であった黒人百科事典の編纂に着手することになった。

デュボイスは、黒人百科事典は黒人の観点により、黒人が主体となって進めるべきものであるという信念を持ちつづけていたが、財団はそれを受け入れず、資金援助を拒んだ。プロジェクトがいったん休止状態になっていた頃、デュボイスは「もちろん私が編集者に指名された瞬間に、公然とであれ密かにであれ妨害が生じることは、そしてそれがジョーンズによるものであることは十分わかっていた」と述べている(49)。

巨額の資金を要するプロジェクトを遂行するには財団の援助が不可欠であるにもかかわらず、デュボイスは自分がプロジェクトの中心にいるかぎり、黒人百科事典は完成しないというジレンマに陥った。その後もストークスとともに助成金獲得への努力を続けるが、結局黒人百科事典プロジェクトは頓挫する。その間、資金の調達先としてGEBとともに期待されたカーネギー財団は、黒人に関する総合的な研究をミュルダールに託し、25万ドルを費やしたこのプロジェクトは1944年、『アメリカのディレンマ』として結実した。

その4年後の1948年、デュボイスにとって屈辱的な記事が『シカゴ・ディフェンダー』(*Chicago Defender*) 紙に掲載された。黒人百科事典計画はデュボイスが「急進的」すぎるために消滅するにいたったこと、デュボイスが亡くなるのを待つことが得策であると考えられたが、デュボイスは「年々健康的になっている」こと、そのためGEBはプロジェクトの続行を決め、タスキーギ大学のF・パターソン（Frederick D. Patterson）に編集責任者になることを説得している、というのがその内容であった(50)。

デュボイスはすぐにGEBの関係者に真相を質したが、GEB側はそのような噂には根拠がないと否定し、ストークスもデュボイスの編集者としての地位に変わりがないことを保証した。しかしながらデュボイスの下で黒人百科事典の編纂準備作業に携わっていたR・ローガン（Rayford W. Logan）は、GEBがデュボイスの「急進的と見られた見解」のゆえに資金を提供しなかったことや「デュボイス博士が世を去るまで」プロジェクトの再開を待つことが決められたことを含め、『シカゴ・ディフェンダー』紙の記事が真実であることを証言している。デュボイスはこのとき80歳になっていた。晩年に執筆され、死後に刊行された自伝の中で、彼は「もし私が50歳で死んでいたら、賞賛されたことだろう。75歳になると、私はほとんど死ぬことを望まれていた」と述懐しているが、それはけっして誇張ではなかったことになる(51)。

しかしながら黒人百科事典の企画の過程で示された黒人のイニシアチブは、ストークスが感じ取ったとおり人種関係が確実に変化しつつあったことを示すものであり、それはケッペルやミュルダールを通じて、『アメリカのディレンマ』の成立過程に繋がっていくことになった。ケッペルやミュルダールは黒人を無視してこのプロジェクトが成功するとは考えず、最初から黒人を参加させることに熱心であった。そしてそれがたんなる名目主義に終わらなかったことは、デュボイスを含めて多くの黒人の研究業績が『アメリカのディレンマ』の内容に実質的に反映されたことに明らかである。

黒人が主体的な活動を行おうとしても財団に代表される白人の資金力に依存しなければならず、それゆえ白人の意向に制約されたことは、黒人にとって大きなディレンマであった。彼らはそうしたディレンマの中で具体的な成果を追求していくしかなかった。デュボイスと同様に当初フェルプス・ストークス基金の黒人百科事典プロジェクトから除外され、その後の参加要請にも応じなかったウッドソンに対して、デュボイスは次のように述べている。

> われわれ二人ともが時々思い起こすように強いられていることですが、敵には金があり、それを使おうとしているということを私は思い出さなければなりませんでした。とするならば、われわれが選択できることは、われわれの観点から見てその金をどのように使うのがいちばん良いのかということではなく、原則をそれほど犠牲にすることなしにその金をどれほど悪用させずにいられるかということでしょう(52)。

注

（1） Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem & Modern Democracy*, 1944, reprint, New York: Pantheon Books, 1972, Vol.1, p.lxxiii; Walter A. Jackson, *Gunnar Myrdal and America's Conscience: Social Engineering and Racial Liberalism, 1938-1987*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990, p.190.

（2） W. E. B. Du Bois to the Board of Directors of the Encyclopedia of the Negro, May 29, 1941, *W. E. B. Du Bois Papers*, Microfilm ed., University of Massachusetts Library, 1982, Reel 53, frame 238.

(3) James D. Anderson, "Philanthropic Control Over Private Black Higher Education," Robert F. Arnove, ed., *Philanthropy and Cultural Imperialism: The Foundations at Home and Abroad*, Boston: G. K. Hall & Co., 1980, pp.148-149.

(4) Ibid., pp.158-161, p.163; Jackson, *op.cit.*, p.10.

(5) Anderson, *op.cit.*, pp.167-169.

(6) Ibid., pp.169-170.

(7) Ibid., p.171; David L. Lewis, *W. E. B. Du Bois: The Fight for Equality and the American Century 1919-1963*, New York: Henry Holt and Company, 2000, pp.132-138.

(8) Lewis, *op.cit.*, pp.141-142, 142-145.

(9) W. E. B. Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept*, New York, 1940, in Nathan Huggins, ed., *Writings*, New York: Literary Classics of the United States, 1986, pp.621-622.

(10) Du Bois, "The General Education Board," *Crisis*, July 1930, p.230.

(11) Du Bois, "Gifts and Education," *Crisis*, February 1925, pp.151-152.

(12) Du Bois, "Negro Education," *Crisis*, February 1918, in *Writings*, pp.875-876.

(13) Du Bois, "Education in Africa," *Crisis*, June 1926, pp.86-89.

(14) Du Bois to Edward Blyden, April 5, 1909, *Du Bois Papers*, 1/877; Du Bois to Charles W. Eliot, August 9, 1909, ibid.; Du Bois to Anson Phelps Stokes, December 9, 1931, ibid., 35/619.

(15) Lewis, *op.cit.*, pp.427-428.

(16) Ibid., p.429; "Conference on the Advisability of Publishing an Encyclopedia of the Negro," *Du Bois Papers*, 35/610-615.

(17) Du Bois to James H. Dillard, November 30, 1931, Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W. E. B. Du Bois*, 3 vols., Amherst: University of Massachusetts Press, 1973-1978, Vol.I, pp.447-448.

(18) "Memorandum to the Conference on the Advisability of Publishing a Negro Encyclopedia," *Du Bois Papers*, 35/622-623.

(19) Lewis, *op.cit.*, pp.429-431.

(20) Ibid., p.431.

(21) Du Bois to Henry G. Alsberg, September 12, 1935, *Correspondence*, Vol.II, pp.109-111, 64-66, 67-68; Lewis, *op.cit.*, p.106.

(22) Anson P. Stokes to Du Bois, March 22, 1938, *Du Bois Papers*, 49/467; Jackson, *op.cit.*, p.101.

(23) "On the Scientific Objectivity of the Proposed Encyclopedia of the Negro and on Safeguards against the Intrusion of Propaganda," Harbert Aptheker, ed., *Against Racism: Unpublished Essays, Papers, Addresses, 1887-1961*, Amherst: University of Massachusetts Press, 1985, pp.164-168; Stokes to Du Bois, February 11, 1938, Stokes to Du Bois, March 28, 1938, *Du Bois Papers*, 49/448, 469.

(24) Du Bois to Stokes, May 29, 1941, *Du Bois Papers*, 53/236; "To the Board of Directors of the Encyclopedia of the Negro," ibid., 53/237.

(25) *Encyclopedia of the Negro: Preparatory Volume with Reference Lists and Reports*, New York: Phelps-Stokes Fund, 1945.

(26) Frederick P. Keppel, "Foreword," Myrdal, *op.cit.*, p.xlvi; Jackson, *op.cit.*, pp.16-22.

(27) Keppel, "Foreword," Myrdal, *op.cit.*, p.xlvi. ミュルダール・プロジェクトについては、前記のジャクソンの研究を参照。ほかに David W. Southern, *Gunnar Myrdal and Black-White Relations: The Use and Abuse of An American Dilemma, 1944-1969*, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1987. 本稿はジャクソンに多くを負っている。

(28) Keppel, "Foreword," Myrdal, *op.cit.*, pp.xlvi-xlvii.

(29) Gunnar Myrdal to Du Bois, November 26, 1938, Aptheker, *Correspondence of*, Vol.II, p.177; Myrdal, "Preface," Myrdal, *op.cit.*, pp.xlix-l; Du Bois to Ira De A.Reid, April 14, 1939, *Correspondence*, Vol.II, pp.190-191.

(30) Jackson, *op.cit.*, pp.109-113, 165-166.

(31) Ibid., chap.4参照。

(32) Brenda Gayle Plummer, "Introduction," Brenda Gayle Plummer, ed., *Window on Freedom: Race, Civil Rights, and Foreign Affairs, 1945-1988*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2003, p.6; Jackson, *op.cit.*, p.318.

(33) Jackson, *op.cit.*, p.104.

(34) Ibid., pp.189, 193, 196, 228-229; Myrdal, *op.cit.*, pp.lxix, 24, 78, 1004, 1016, 1021.

(35) Jackson, *op.cit.*, p.202.

(36) Du Bois, "The American Dilemma," *Phylon*, 5 (second quarter, 1944), pp.114-124.

(37) Ibid., p.121.

(38) Jackson, *op.cit.*, p.25; Lewis, *op.cit.*, pp.372-374, 480-481.

(39) Du Bois, "The American Dilemma," *Phylon*, pp.121-122.

(40) Ibid., p.124.

(41) Jackson, *op.cit.*, p.112; Myrdal to Du Bois, August 15, 1941, *Du Bois Papers*, 53/60.

(42) Myrdal, *op.cit.*, p.1132; Southern, *op.cit.*, p.91.

(43) Myrdal, *op.cit.*, p.928; Lewis, *op.cit.*, p.451; Jackson, *op.cit.*, p.246.

(44) 竹本友子「世紀転換期の合衆国黒人運動における分化と統合—W・E・B・デュボイス『フィラデルフィアの黒人』を中心に—」『ヨーロッパ史における分化と統合の契機』(平成13年度科学研究費補助金［基盤研究B］研究成果報告書) pp.91-97を参照。

(45) "Confidential Memorandum regarding the Significance of the Proposed Encyclopedia of the Negro," Aptheker, *Against Racism*, p.163.

(46) Du Bois, "The American Dilemma," *Phylon*, p.123; Jackson, *op.cit.*, p.187.

(47) "Memorandum to the Conference on the Advisability of Publishing a Negro Encyclopedia," *Du Bois Papers*, 35/622-623; Du Bois, "The American Dilemma," *Phylon*, p.122.

(48) Du Bois, *Dusk of Dawn: An Essay toward an Autobiography of a Race Concept*, New York, 1940, in *Wrtings*, p.790.

(49) Du Bois to R.R. Moton, September 26, 1933, *Du Bois Papers*, 40/488.

(50) *Correspondence.*, Vol.III, pp.191-192.

(51) Du Bois to Fred McCuistion, February 22, 1948, McCuistion to Du Bois, February 27, 1948, *Du Bois Papers*, 61/1052-1053; Stokes to Du Bois, March 2, 1948, ibid., 63/ 85; *Correspondence*, Vol.III, pp.194-195; Du Bois, *The Autobiography of W. E. B. Du Bois: A Soliloquy on Viewing My Life from the Last Decade of Its First Century*. International Publishers, 1968, p.414.

(52) Du Bois to Cater G. Woodson, January 29, 1932, *Du Bois Papers*, 37/820.